

第7章 国立大学のあり方に関する有識者の意見

佐藤直由（東北文化学園大学）

7-1. 大学の普遍性・地域性

7-2. 地域別・領域別の志向

7-3. 関心度別志向と有識者の意見

7-1. 大学の普遍性・地域性

国立大学における大学＝地域交流を考える際の一つの目安に大学観といったものが作用していると思われる。ここでは有識者のそうした大学観の一端を探ってみることにしよう。

有識者調査では、国立大学における一般的な教育・研究のあり方について、有識者の意見を聞く質問を設けた。それは、「大学の人材養成について」、「大学の教育について」、「大学の研究について」、「大学の社会的サービスについて」、「大学と企業との関係について」、「大学教員と地域社会との交流について」という6項目であり、それぞれに地域的な関わりを志向する立場と、地域にとらわれない普遍性を志向する立場を対方向におき、どちらを支持するか（それぞれに「賛成」、「どちらかといえば賛成」の2カテゴリーの選択肢）を問う対比的な質問として設定した。

その結果が表7-1である。表中のAが「地域性」を志向する意見であり、Bが「普遍性」を志向する意見である。6項目の中で普遍性志向を支持する割合が高いのは、「大学の人材養成」であり、「地域を

表7-1 国立大学のあり方

「国立大学のあり方に関する以下それぞれのAとBの意見についてあなたの考えに近いもの」

	A	Aに賛成	どちらか と い え ば		Bに賛成	B
			A	どちらかと い え ば B に 賛 成		
大学の人材養成	地域の発展に役立つ人材の養成を、第一に考えるべきだ	10.4	24.7	34.6	24.5	地域を超えて活躍する人材の養成を第一とすべきだ
大学の教育	地域と交流して、実践的な教育の充実をはかるべきだ	24.4	41.9	19.1	8.8	地域とかかわりなく、大学独自の理念にたった教育をすべきだ
大学の研究	地域との交流を持ちながら、新たな時代の学問の発展をはかるべきだ	24.2	43.5	17.2	9.5	地域社会にとらわれることなく、普遍的な学問を発展させるべきだ
大学の社会的サービス	地域社会のニーズに応じて、大学は積極的にサービスを提供すべきだ	28.2	45.8	15.3	4.9	地域社会へのサービスよりも、大学は教育・研究に専念すべきだ
大学と企業との関係について	企業との共同研究や受託研究、人的交流を積極的におこなうべきだ	36.4	44.0	10.0	3.8	営利が目的となる企業との、積極的な交流は避けるべきだ
大学教員と地域社会との交流	学問的な発展のためにも、教員は、積極的に地域と交流すべきだ	44.1	45.8	3.4	0.8	本来の教育・研究に力を注ぐためにも、教員は地域との交流は極力控えるべきだ

超えて活躍する人材の養成」という普遍性志向に賛成する有識者は約60%で6項目の中では最も多い。地域性志向を支持する割合が最も高いのは、「大学教員と地域社会の交流」であり、「積極的に地域と交流すべきだ」という地域性志向に賛成する有識者は90%を占めている。「大学の教育」、「大学の研究」、「大学の社会的サービス」、「大学と企業との関係」では、いずれも地域との積極的な交流を通してという地域性志向を支持する割合が高くなっており、「大学の教育」、「大学の研究」では60%以上、「大学の社会的サービス」では70%以上、「大学と企業との関係」では80%の有識者が賛成としている。

有識者は人材については普遍的な通用性を持つ養成を期待しているものの、大学での教育や研究には地域との関わりを望んでいるし、特に地域への社会的サービスや企業との交流、教員の地域交流には積極的な考えを有していることがわかる。

表7-2は、各項目と「大学の社会的サービス」との間の地域性志向、普遍性志向の関連性を示したクロス表である。「大学の教育」、「大学の研究」、「大学と企業との関係」、「大学教員と地域社会との交流」の各項目において、それぞれ地域性志向を支持している有識者は、「大学の社会的サービス」についても地域性志向を支持している割合が圧倒的に高い。同様に、「大学の人材養成」、「大学の教育」、「大学の研究」、「大学教員と地域社会との交流」の各項目において普遍性志向を支持する有識者は、「大学の社会的サービス」についても普遍性志向を支持している割合が高くなっている。しかしながら、「大学の人材養成」において地域性志向を支持していても「大学の社会的サービス」では普遍性志向を支持する割合が高く、「大学と企業との関係」において普遍性志向を支持していても「大学の社会的サービス」では地域性志向を支持する割合が高いという面もみられる。

すなわち、「大学の社会的サービス」に対する地域性志向、普遍性志向の支持傾向と首尾一貫した支持傾向を示しているのは、「大学の教育」、「大学の研究」、「大学の教員と地域社会との交流」であり、支持傾向という関連性の一致がみられないのは「大学の人材養成」と「大学と企業との関係」という二つの項目である。ここには「大学の人材養成」と「大学の社会的サービス」は区別されるものという認識、あるいは人材養成は地域の発展にであれ、地域を超えてであれ、大学が教育・研究に専念す

表7-2 国立大学のあり方（社会的サービスとのクロス）

		全体	大学の社会的サービスについて		
			地域性志向	普遍性志向	
			78.6	21.4	
大学の人材養成について	地域性志向	37.3	41.7	58.3	**
	普遍性志向	62.7	21.2	78.8	
大学の教育について	地域性志向	70.5	79.9	20.4	**
	普遍性志向	29.5	36.9	63.1	
大学の研究について	地域性志向	71.8	81.4	18.6	**
	普遍性志向	28.2	36.5	63.5	
大学と企業との関係について	地域性志向	85.3	89.9	10.1	**
	普遍性志向	14.7	68.8	31.2	
大学教員と地域社会との交流について	地域性志向	95.5	81.2	18.8	**
	普遍性志向	4.5	24.1	75.9	

*無回答を除いた割合。

P<0.01

ることによってなされる、という認識があるではないかと考えられるし、また、「大学と企業との関係」と「大学の社会的サービス」も区別されるものという認識があるのでないかと考えられる。

7-2. 地域別・領域別の志向

次に、有識者の在住地域別、所属領域別に国立大学のあり方に関する意見の結果を見てみよう。ここでは地域性志向と普遍性志向の強弱を簡明にみるために各項目の平均値を算出し、中央値との偏差で示した。それが表 7-3 であり、偏差の数字が大きければ平均値が高いすなわち普遍性志向が強いということであり、小さければ平均値が低いすなわち地域性志向が強いことを示している。

この表からどの地域の有識者も「大学の人材養成」では平均値が高く、普遍性志向が強いことがわかるが、特に宮城の有識者の普遍性志向が高いのが特徴である。他の5項目はどれも平均値が低く、どの地域の有識者も地域性志向が強いことが明確である。項目間でみると、「大学教員と地域社会との交流」における平均値が最も低く、地域性志向が高くなっている。この項目で平均値の最も低い地域は山形であり、教員の積極的な交流を有識者が強く志向していることが示されている。また「大学の教育」、「大学の研究」、「大学の社会的サービス」の3項目で平均値が高いのは宮城と福岡であり、他の地域の有識者に比べ大学の教育・研究の普遍性志向がより強いものとなっている。

有識者の領域別でみると、普遍性志向が強いのは「医療・保健」領域の有識者であり、すべての項目で平均値が高くなっている。それに対して「市民団体・ボランティア」、「報道・出版」の有識者は、

表7-3 国立大学のあり方に関する意見（地域別・領域別）

	大学の人材 養成	大学の教育	大学の研究	大学の社会 的サービス	大学と企業 との関係	大学教員と 地域社会と の交流
宮城	1.52	-0.22	-0.19	-0.45	-0.69	-0.88
山形	0.25	-0.54	-0.53	-0.55	-0.73	-0.96
新潟	0.16	-0.45	-0.57	-0.56	-0.79	-0.94
広島	0.07	-0.42	-0.39	-0.61	-0.74	-0.92
香川	0.14	-0.43	-0.49	-0.59	-0.66	-0.78
福岡	0.45	-0.26	-0.26	-0.49	-0.73	-0.87
佐賀	0.01	-0.42	-0.52	-0.53	-0.71	-0.91
	**	**	**	**	**	**
政治	0.09	-0.46	-0.49	-0.57	-0.93	-0.95
行政	0.58	-0.32	0.37	-0.59	-0.81	-0.94
産業・経済	0.33	-0.30	-0.35	-0.46	-0.83	-0.90
教育	0.24	-0.42	-0.47	-0.55	-0.69	-0.91
医療・保健	0.50	-0.09	0.32	-0.39	-0.61	-0.77
社会・福祉	0.29	-0.27	-0.34	-0.54	-0.65	-0.97
市民団体・ ボランティア	-0.02	-0.46	-0.54	-0.65	-0.62	-0.86
報道・出版	0.40	-0.52	-0.38	-0.76	-0.79	-1.02
文化・芸術	0.02	-0.42	-0.44	-0.48	-0.48	-0.96
	**	**	**	**	**	**

**p<0.01

注：各項目ともに、「Aに賛成」=1点、「どちらかといえばAに賛成」=2点、「どちらかといえばBに賛成」=3点として平均点を算出し、点数の中央値(2.5)からの偏差を示した。

「大学と企業との関係」を除いて全体的に平均値が低く、地域性志向があらわれている。また、「行政」領域の有識者は「大学の人材養成」、「大学の研究」で普遍性志向がやや強く、「政治」領域の有識者には「大学と企業との関係」における地域性志向の強さが見られる。

7-3. 関心度別志向と有識者の意見

ところで、大学のあり方についての意見は有識者の大学に対する関心の違いにも関わってよう。そこで国立大学への関心度の高低による関心度類型でみたのが表 7-4 である（関心度類型については第 4 章を参照のこと）。

大学へ高い関心をもつ層も低い関心の層も、「大学の人材養成」では普遍性志向が高いが、他の項目は地域性志向を示している。「大学教員と地域社会との交流」では高関心層も低関心層も地域性志向の支持は 90%を超えている。高関心層と低関心層という 2 類型を比較すると、「大学の人材養成」では高関心層で普遍性志向、低関心層で地域性志向が高いものの、「大学の社会的サービス」、「大学と企業との関係」では高関心層で地域性志向が高く、逆に低関心層は普遍性志向の割合が高関心層より高くなっている。ここには関心度の差異による微妙な認識のずれが表われているのではないかと推測される。

表7-4 国立大学のあり方(関心別)

		全体	高関心層		低関心層
大学の人材養成について	地域性志向	37.7	35.8	<	39.7 *
	普遍性志向	62.3	64.2	>	60.3
大学の教育について	地域性志向	70.8	70.8		70.7
	普遍性志向	29.2	29.2		29.3
大学の研究について	地域性志向	72.1	72.2		72.0
	普遍性志向	27.9	27.1		28.0
大学の社会的サービスについて	地域性志向	79.1	80.1	>	77.4 *
	普遍性志向	20.9	19.3	<	22.6
大学と企業との関係について	地域性志向	85.6	87.1	>	84.0 *
	普遍性志向	14.4	12.9	<	16.0
大学教員と地域社会との関係について	地域性志向	95.8	96.2		95.4
	普遍性志向	4.2	3.8		4.6

これまで、国立大学のあり方についての有識者の回答結果を見てきたが、全体的な傾向として、人材養成については普遍性志向を期待するが、教育・研究においては地域性志向を持ってほしいという期待が現されているとあってよいだろう。

しかしながら、大学の存在意義は、普遍性志向対地域性志向というような対比的なとらえ方にあるのではなく、両面を持つのだという指摘する意見が、オープンアンサーで述べられている。特に人材養成における両面性についての意見が目立った。そのいくつかを列挙してみよう。

国立大学として、地域を超えて活躍する人材の養成を第一義とすべきと考えるが、だからといってまったく地域とかかわりをもたなくしても良いとは思わない。(宮城)

“ローカルな研究”を通じて“グローバルな人材の育成”を実現することが今後、地方における大学のあり方として必要。(山形)

大学の価値は第一義としては真理の探究、知識の吸収に努め人間性の涵養がいかに進められるかではないでしょうか。……地域で活躍する人材とか地域を超えて活躍する人材の区別ではないのではないのでしょうか。(新潟)

大学は人材教育機関と研究機関であり、また地域社会を重視する考え方もあっても良いのではないかと。地域を超えての教育・研究も国立大学の使命とは思いますが、地域社会の一員としての分野も必要と思います。二面性があるものと思います。(新潟)

国立大学がどの程度の“地域性(ローカルティイ)”を持つべきかは大変難しい問題だと思います。何故なら、大学は“グローバル”な理念、研究レベルを研究・教育することにより全国・世界から学生と研究者を受け入れるべきですし、卒業生も同じように全国・全世界に供給すべきです。しかし同時に、大学は自らの拠って立つ地域を常に意識し、その地域に“ローカル”な貢献をすべきです。この二つともが、ひとつの地域に根ざした大学の使命として果たさなければならない。だから難しい。(新潟)

全国に通用する人材は、地域でも有用である。…地域にあつて地域を超える必要がある。(香川)

大学は地域社会に貢献する一方、地域を超えた、グローバルなテーマの一分野を担うことのできる能力を持つべきである。(福岡)

九州大学には、地域社会のために大いに貢献していただきたい。しかし、養成する学生は、地域を超えて活躍する全国区の人材であってほしいと願います。(福岡)

同様の意見は、人材養成に関してだけでなく、教育や研究に関しても述べられているのが散見される。したがって、こうした意見は普遍性志向と地域性志向は連結するものであり、大学はその両面に貢献する存在であるという認識がなされているといえる。

もっとも、普遍性志向と地域性志向のどちらかを指示する意見もある。前者の意見は次のようなものである。

地域社会との関わりにこだわることなく大学独自の理念にたつて普遍的学問活動に専念することを望みたい。(宮城)

後者の意見は次のようなものである。

普遍的な学問の研究も大切であるが、地域とともに歩み、地域に溶け込んだ大学となるためには、地域の歴史、経済、社会情勢などに十分留意しながら、地域社会が求めている技術や人材の育成に積極的に取り組むべきであると思う。(香川)

前者の意見と同じ意味を持つ意見は、どの地域の有識者にもみられ、大学の教育研究機関としての

独自性を意義づけている。後者の意見と同様の意見は、“地方”の“国立”の大学という点に意義づけの重みをおいている。次がそれである。

「全国各県に大学、特に国立大学が配置されているが、それぞれの大学に得意な歴史的経過があるとして、基本はそれぞれの地域の経済社会文化の発展を図るように地方に大学があると理解したい。(山形)

以上、国立大学のあり方に関する有識者のとらえかたや意見を見てきた。有識者の大学のあり方に関する考えかたは多様である。オープンアンサーには、大学全体として語ることの困難さの指摘、組織というよりも個人の教育研究への取り組み方や地域的課題への対処の仕方が関わっているといった指摘もみられた。しかし総じて、大学のあり方として地域社会との交流は深める必要があるという意見が強いし、将来的にも相互に交流が要請されているのではないかという認識を示しているといえよう。